上高井教育会報

第171号
発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長 佐藤昭二
編集人 会報編集委員長 太田秀雄
印刷所 須坂新聞社

同好会活性化のために

―昭和初期の活動に学ぶ―

同好会副会長　浅岡修一

本年度の同好会が発足したのは、四月二十日であった。本年は、のべ三百十七名の会員が参加し、それぞれの同好会で活動をしている。同好会活動の停滞化が話題になって久しいが、昭和初期の本会の状況を記して参考に資してほしい。

当時同好の士が集まって研鑽したひとつに、短歌があった。島木赤彦（一八七六―一九三六）の後を受けて上高井に入った土屋文明（一八九〇―一九九〇）は、昭和二年（一九二七）「東歌」の講義を行った。当時『信濃教育』編集主任であった文明は、アララギ派歌人として短歌界で重きをなしていた。会員は文明の講義を聞くために集まり、旧教育会館の講堂に入りきれなかったという。

当時の会員では、丸田嘉雄（一九〇二―一九四六）を中心にしてアララギに属している人がかなりいた。それらは、高甫小学校の教職員を中心にした同好の士たちであった。また、会員だけでなく、教員以外の人たちにも輪が広がっていた。それらは、北山秋雄（一九〇三―一九九三、山田村）、山岸三義（一九〇六―一九四一、井上村）、村石波之助（一九一三―一九八七、高甫村）であった。

昭和初期の短歌の隆盛に学ぶことは、会員の自発的研修意欲が、地域の幅広い同好の士と結びついた点にある。本会の十五の同好会は、それぞれが特徴的な活動を行い、成果をあげている。その成果とともに、活動の一部分を地域に開くことが、同好会活性化への一助につながるだろうと思う。

（常盤中）

日本道徳会に参加して

小伊藤信

日本道徳学会は、心理学学会と比べて、歴史は浅いが、道徳の学会としては、もっとも大きなものと考えてよいだろう。全小道・全中道・道などは、研究会、同好会的傾向が強いが、道徳学会は、それらを束ねるものと考えてもよいといえる。

学会は、年二回（春・秋）大会を開いている。そのうち一回は、東京周辺で行い、もう一回は、地方開催となっている。一回が、東京周辺というのは、我々にとっては参加しやすい条件の一つだ。

今年度は、春は浦和、秋は九州となっている。

大会運営は、開催地域の特色を生かし行われているが、浦和大会のプログラムは、次の通りである。

まず、大会テーマを「社会の変化に対応し、主体的に生きる児童生徒を育てる道徳教育」と置き、小学校二本、中学校一本の研究発表を行った。共通キーワードは、人間尊重であったように思う。

児童の道徳性は、日々の人間関係のなかで培われるものであるから、道徳の時間だけであれこれ述べるつもりはないが、その時間に大きなウェイトがかかっていると考えた時、授業の改善が必要となる。研究発表は、それに対し、示唆を与えてくれている。一例を示せば、授業にパネルディスカッションの形態を取り入れたりとか、他教科との関連を密にした総合単元的道徳等である。また、ねらいとする価値に対してもより深く分析を行っている。友情（友達関係）を「友達だから」・「大事な友達」・「本当の友達」と三つの段階に分け、全く別の資料を用いて扱い系統をもたせる工夫である。

ともすれば、一発勝負の道徳の授業に陥りやすい問題点を打開する可能性を示すものと筆者は考える。

これらの研究発表の後、記念講演として、鳥塚恵和男氏の「渋澤栄一翁の実学に学ぶ」が行われたり、押谷慶昭教授の「道徳教育の現状と課題」の問題提起がなされたりと、いろいろな面から道徳を考えることのできた一日であった。

（栗ガ丘小）

教育会だより

7・26　教育七団体結成会
7・26　臨時常任委員会
8・23　臨時代議員会
8・27　教育七団体代表者会
8・29　教育研究集会中間連絡会
8・30　教育会臨時総会開催　定款一部変更を承認
9・4　教育会講演会（於須坂市公民館）
講師　増田れい子先生（エッセイスト・フリージャーナリスト）
演題「育むとはどういうことか」
9・26　第4回常任委員会
10・7　教育研究集会学校委員会・レポート交換
10・9　上高井教育会報171号発行
上高井教育研究集会於相森中学校

須高の山と川⑫

百々川

百々川は、破風岳を源とした灰野川と根子岳を中心とした山々に源をもつ米子川が合流して成り立ち、鉄分を含む強い酸性の河川である。

墨坂中学校は、通学区の大部分がこの百々川扇状地上にあり、校舎は百々川のほとりに建つので川とのかかわりが深い。たとえば、校地内には伏流水が湧き出し、花壇の水くれに利用している。堤防はPTAが草刈りを行い、部活動では「土手ラン」と称して、ランニングコースに使用している。河原では、自然観察や写生会をしたり、ボランティア活動として、河川のゴミ拾いを定期的に行ったりしている。こうしたかかわりの中で、「清流をいつまでも」という想いを深めているのである。

本年度は親水事業として、堤防に階段を作っていただいたので、水辺に一層行きやすくなった。百々川は私たちに厳しい試練を与えてくれると共に、恵み豊かな河川でもある。

今、河原にはススキの穂が揺れ、水辺をイカルチドリがせわしく動き回っている。この安定した水辺環境を今後も保ち続けていきたい。

（墨坂中　市川武彦）

夏期研修で学んだこと

哲学同好会
「ことばと思案」から学んだこと

涌井　二夫

哲学というと、それだけで敬遠される向きの多い今日ですが、哲学は決して理屈をこねまわす堅苦しい学問ではありません。

とかく忙しいことがらに目を奪われ、自分の回りのことがらに心が向かない故に哲学は特に日常生活のもののことがら、感じ方が課題（テーマ）なのです。

子ども達と一緒に学びながら、子ども達の素直な見方や感じ方に共感することが多い。一方、どのような見方や感じ方を育てたいのか、育てていけば良いのか、が見えないでいる自分であることに思い当たることが多い。

子どもは敏感な感性の持ち主であり、「こころ」の深さをもっています。私たちは、忙しさにかまけ、自らのみずみずしい感性と心の深さを失うとき、子ども達の期待に応えられない。そしてそれは、常に求めて学ぶことによってのみ保たれるものであろう。哲学同好会で読み合わせをするのも、中央の大学の先生のお話を聞くのも、この感性を磨き保つことにほかならない。

本年度上高井哲学同好会夏期研修は、「野尻夏期大学・哲学講座」を聴講することであった。七月二十九日、野尻湖畔で涼風を感じながら三百名近い先生方の真摯な姿勢の中でお聴きしたご講義は、忘れかけていた思惟の楽しさを呼び覚ましてくれるものでありました。講座は京都大学大学院教授藤田正勝先生の「ことばと思索」でした。

講義概要

私たちの思索は言葉で為され、言葉によって真なる知を求めてきた。それ故、ギリシャ哲学・西洋哲学があるように、日本哲学・東洋哲学があってよい。そして東西哲学は「ことば」の違いから特徴ある思索のあり方を生み出している。

日本語には三つの特色がある。

その第一は、日本語は必ずしも主語を必要としないという点である。一般日本語に主語がないというのは、主語が省略されているにすぎないと考えるがどうだろう。

むしろ、「主語を必要としないし」、主語と述語の関係を基本形にしないところに日本語の特色がある。

我々は知覚する白い・さらさら・辛いといった性質で「塩」という実態を表現する。しかしその属性から独立して塩はシオとしての実態があり、実態に依存して性質が生まれる。これを属性というが、この属性は出たり入ったりして変わる。西洋では、実態は主語となり、属性が述語となって、ヨーロッパ語の主語＋述語という構文から、ものの見方をも規定し、自ら自然科学的なものの見方考え方を生み出してきた。それに対し日本語は必ずしも主語を必要としない、基軸をたてない構文は、属性・ことがらをそのままで述べるという日本人の思索の特色を持った。

第二の特色は、日本語は感情・心情でことがらを見るという点であり、第三は、厳密な表現を好まないあいまい表現（余韻）という特色である。

日本人の発想の仕方に、

(1)自己と自然とを区別しない。

(2)「私は」ということばをあまり使わない。

(3)文を読むとき、日本語ほど読み方に創造的な営みをさせる言葉はない。

等々の特色がある。これらの特色は思惟の特色でもあり、日本人の心意に繋がる。以上

（栗ガ丘小）

コンピュータ同好会
夏期研修で学んだこと

山上　道夫

八月七日、夏休みの一日を使い、上高井教育会コンピュータ同好会による「パソコン通信とインターネット研修会」に参加させていただきました。

研修会には、同好会に所属する小中学校の先生方約十名が参加し、プロフィット技研の松嶋さんと、相森中の麻田先生が講師となっていただき、長野市内のプロバイダーの協力でインターネットに接続、ホームページを開設している学校などにアクセスするなど実際に操作しながら説明を受けました。

県内ではすでに、篠ノ井西中、美麻中、上山田小、岡谷西部中などが学校独自にホームページを開設し、須坂市内でも七月にマルチメディア研修会を開くなど、教育面におけるインターネットに関する知識や意欲が高まっており我々教師の深い理解の必要性を強く実感しました。

今、教育現場では、ほとんど技術・家庭科が中心となって、情報基礎として、ワープロ、データベース、図形処理、表計算を中心とした基本的なことを作っています。さらに発展したとしても、プログラミングや多機能のソフトを使うのがせいぜいのような気がします。しかし、それらはほとんど受動的なものであり、もっと自分から知りたい多くの情報を得て、各種の学習に役立てようとするには限界がありました。それをパソコン通信やインターネットにより、能動的に幅広く、全教科にわたり発展学習させる魅力は十二分にあります。

例えば社会科で、ホワイトハウスや総理官邸に気軽にアクセスし、電子メールなどを使っての情報交換をし、国際感覚や広い視野を身につけることもできますし、各学校で行う学校祭の学級展などでも簡単に欲しい情報が得られるため、いままでにない画期的な内容のものが期待できそうです。

予算的には、一度契約・設置・工事費さえ払えば、三分間十円という程度のようです。ただ、それに見合う全校職員の活用しようとする意識の高揚と理解、教科指導への位置づけなどをしっかりしないと、単に一部の人、一定の期間による使用に止まり、宝の持ち腐れに終わる恐れが十分あります。それは現状のコンピュータの活用においても言える事です。

他にも考えられることとしては先生方の他校との情報交換です。今までの熟練した先生のみの個人的活用でなく、全職員、各教科ごと、教材研究をはじめ、校内研修における研究交換の場となれば、出張となる堅苦しい研究会も減り、より気軽で有意義な相互研修の場となるでしょう。

また、小学校・中学校・高校、ひいては大学との相互の情報交換もおもしろいと思います。例えば中学校における進路指導ですが、進学する生徒にとって必要となる資料や情報は今まですべて中学の先生を媒介にして行われている訳ですが、ホームページを通じ、自分で調べたい高校を選んで情報を得ることができれば、従来の受け身的な進路指導が、必然的に自ら選択するという能動的なものに変わっていくことでしょう。

いずれにしても、まだまだ一部の活用に止まっている現状ですが、ここ数年で前述のことが夢でなくなるでしょう。

（墨坂中）

書道同好会
夏期研修に参加して

日根野政子

夏休みの八月一日・二日の二日間、書道同好会の夏期研修会に参加しました。昨年度もあったのですが丁度人間ドッグの日と重なってしまい、今年が初めての参加でした。

今年は新しい会館でエアコンのきいた部屋での練習。暑い日中、環境の良い所での研修で感謝です。

講師の北島靖啓先生から、「上代和様の展開過程について」の講義を受けました。今まで、変体かな→ひらがなの流れは聞いていたのですが、それ以前に草仮名のあることを学びました。

いよいよ実習。『伝佐理の綾地歌切』をお手本に草仮名の練習です。筆は仮名用の穂の長い筆。まわりの先生方を見ると筆の上の方を持って、さらさらさら。「あらあらどうしよう。」筆の持ち方までよく分からない私。一人困ってキョロキョロ。

「先生、すみません。筆はどの辺を持ったらよいでしょうか。」

「二文字のお手本を書いていただけませんか。」

先生はあきられたと思いますが、気持ちよく教えて下さいました。書人会の先生方、同好会の先輩の先生方が三十一文字の練習が終わる頃、私はまだ数文字という状態。

二日目は半切用紙に三十一文字を自分で字配りをし、自分で作品を創る課題。「作品を創る」なんと楽しいことかと思いきや、一文字一文字を書くのが精一杯の私には並べて書く以上望むべくもない。少し筆に慣れたか、何とか三十一文字を用紙の中に入れ、作品?にしました。

他の先生方と比べれば、そして、作品を並べれば、未熟な字というのは一目瞭然。ほとんど筆を持つことのない自分が、毎日筆をもっておられ実力のある先生方のように書けるはずがない。初めからさらさら書けるはずがない。私は私とひらき直り。ただ何も考えず、筆をもてたこと。文字を書けたこと。そして、教えてもらえたことを楽しみました。

こんな私をこりもせず応援し、指導して下さった北島先生、書人会の先生方、同好会先輩の先生方に感謝です。

また休憩時間には、先生方が持ってきて下さったもろこし、おやき、もも等々を食べながらの雑談。なごやかな雰囲気で緊張感がとけ、ホッとさせられました。（豊洲小）

初任研洋上研修に参加して

野本　毅

私は、今年度の文部省主催の初任研洋上研修に、幸運にも参加する機会をいただき、去る八月一日から十日までの十日間、沖縄・鹿児島において研修をさせていただきました。

私が感じたこの研修で最も良かったことは、他県から集まった多くの初任の先生方と語り合えたことです。どの先生もお互いに初任者ということもあり、自分の考えや言いたいことを思う存分語り合うことができました。臨時採用を経験された先生も何人かおり、彼らの経験に基づく様々な話を聞くことができました。特に、約二十人のチームに分かれて討議をした時は、「子どもが生き生きする授業」について、自分たちの今までの経験や、一学期の間に抱いた悩みに基づき、素晴らしい話し合いをすることができました。討議で話し合われたことを、最後に発表会を開き全体に報告することになっていたのですが、私は発表会係を任されていたので、討議が深まっていく過程を最後までチーム内の司会として関わっていくことができ、自分にとって大変ためになったと思います。

その他にも、興味を引くような様々な分野の数多くの講義を聴くことができました。その中でも、学校カウンセリングについて話して下さった東山弘子先生の「生徒がダウンしたときにエネルギーを補給する場所が学校にあるか」という言葉が印象的で、自分は今まで生徒にどのように接してきただろうか、と考えさせられました。

最後に、果たしてこの研修は自分にとって有意義であったかどうか考えてみました。今は、洋上研修に参加させていただいた充実感でいっぱいです。しかし、これからの教員生活の中で、研修で学んだことが生きてこなければ有意義であったとは言えないのではないかと思います。洋上研修に参加して良かった、有意義であった、と胸を張って言えるように、これからの教員生活を送っていきたいと思います。

今回、このような機会を与えてくださった文部省の方々、諸先生方に深く感謝いたします。（相森中）

本校の宝⑮　高山中学校
「ラ・サリーンナスの少年」と「心直如弦」の書画

本校体育館ステージ両脇に二つの額が掲げられている。

一つは、『ラ・サリーナスの少年』と題する大きな額絵である。（写真）この作品は元東京教育大学名誉教授で日展評議員もされた松木重雄先生の作品である。

ラ・サリーナスは、乾いた塩湖のことをいう。砂漠地帯に見られる特有な湖である。ペルー南部の町アレキパからアンデス山脈を越え、チチカカ湖に通じる道にある。塩は既に乾き、数十メートルの底まで白い岩のように固まっているのだ。松木先生は旅の途中、ここで一人の少年に出会った。赤いポンチョを着た少年が突っ立ったまま、じっとこちらを見つめている。その目の輝きが絵を見る人に何かを語りかける。

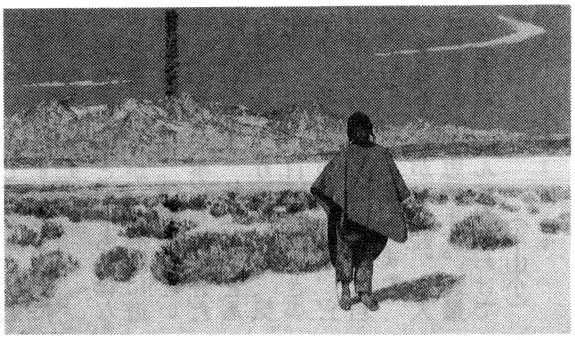
厳しい自然と貧しさの中でも力強く生きるこの少年の目の輝きは、飽食の時代に恵まれた生活を送る私達に「生きる」ことの意味を考えさせるのである。

もう一つは、『心直如弦』（心直なるは弦の如しと読むという）の額である。

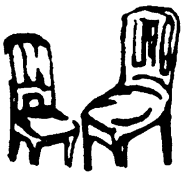
この書は、上条信山先生の八十五齢の時の作品である。人は心が素直であるとき、弦楽器の弦のように響き合い成長できるものだ。〝少年よ心素直であれ〟と諭し励まされているように思う。

信山先生の書『不扶而直』（蓬、麻中に生ずれば、扶けずして直し）を想い出す。

二十一世紀は心の時代だと言われるが、新しい時代を担う子供達が素直で豊かな心を培い、どんな困難にも負けない、生きる力を身につけてほしいと願っている。（山田信雄）



火ばち談義



サイトウキネンフェスティバル「六年生のための音楽会」に参加して

中邨　恵子

仁礼小学校に赴任して三年やっと念願のサイトウキネンの音楽会へ行ってきました。松本総合体育館のメインアリーナが会場ということで、時間と費用の両面からなかなか参加が難しかったこともあり、今年は、申し込み通知が届くとまず詳しい説明よりも前にその音楽会のすばらしさを、校長先生、教頭先生、そして六年生の担任の先生にアピール、即ＯＫを頂きました。

さて、この音楽会、小澤征爾指揮をはじめとし、世界的に活躍されている音楽家が集まり、演奏する、まさに世界的レベルの音楽会です。斉藤秀雄先生に音楽を学んだ演奏家がこの時だけ集まり、息のあった演奏をして下さるのです。そんな音楽会に、六年生だけが招待してもらえるということは、六年生にとっては一生に一回だけの機会ということになります。その価値を六年生はきっと大人になってから実感することでしょう。

メインアリーナの会場はすごいです。何がすごいって、子どもの数。八千名がぎっしりなんですから仁礼の子供たちの目は点のようでした。そしてさらに驚いたのは鑑賞態度の良さ。この人数でざわつくどころか静まりかえった中『白鳥の湖』が流れてきます。引きつけられていく子供たち。指揮者、演奏者、鑑賞者の呼吸がひとつになり、何と気持ちの良い時間となったことでしょう。生の演奏を聴くことのすばらしさを体感できたひと時でした。子供の日記に「今日、サイトウキネンフェスタに行ってきました。音楽室で聴くのと全然違いました。生の演奏はやっぱり違うなと思いました。」とありました。子供たちの心の中にも深く残る音楽会となりました。

今回のこの音楽会は、子供たちへのよい機会というだけでなく私自身の活力ともなりました。学生の頃わざわざ東京まで聴きに出かけていたことを思い出し、また音楽への思いを新たにした一日でした。

（仁礼小）

植物と子ども

川尻　年輝

私の家には、植物（鉢植）があります。緑色があざやかで、心をなごませてくれます。植物ですので、水くれをしなければすぐ枯れてしまいますが、水をくれすぎても弱ってしまいます。適量と時期というものがあるようです。

さて、学校で子どもたちの様子を見ておりますと、実に多くのタイプがいることがよくわかります。のみ込みの速い子ども、遅い子ども、運動が得意な子ども、絵が得意な子ども……など。昔から「十人十色」という言葉がありますが、まさに、そのとおりだと思います。いや、もしかしたら、十人二十色、十人三十色かもしれません。

多くの子どもが集まる学校では、そのほとんどが集団行動で、勉強するのも集団での機会が多いです。これは、教師の数と子どもの数を考えれば、ごく自然なことだと思いますが、いろいろな場面で、〝もっと個別に接する機会があれば〟と思います。授業の中でそのように思うことに、よくぶつかります。

話を最初に戻します。植物の〝水くれ〟のことを書きましたが、この水くれと教育というのは、どこか似ていると思います。

水くれをしなければ、弱って枯れてしまいます。また、くれすぎても良くない。かといって、何もしなくても、ある程度は成長するのですが。

また、天気の良い日中に水をくれると、植物は弱ってしまいます。ところが、夕方に水をくれると、次の日は本当にいきいきとしています。適量と時期のむずかしさが実によくわかります。

教育に王道というものはないと思いますが、（無限に道がある）私は〝気配り〟というものを、大事にしていきたいと思います。特に、子どもたち一人ひとりに対する〝気配り〟です。日頃の忙しさの中、つい忘れがちですが、どの子どもに対しても大きな目で、しっかり見る。また、つきなみですが〝個性〟を大事にしたいと思います。適量と時期は、みんな違うわけですから……。

（小山小）

リラックスした時間を楽しむために

内山　良一

陸上競技を教えていく中で指導内容も少し変わってきている。以前は「リラックス」させることを走りの中に取り入れるためにリラックスの仕方、力の抜き方を指導してきた。これにより日本の選手はストライドを広げ、外国の選手と対等の記録を出せるように努力してきた。しかし、そこには日本人にとって必要以上に広がったストライドが残り、世界の記録と大きく離れてしまった。近年、男子の短距離選手が記録を伸ばしてきた中には、リラックスした状態をうまくつくり出す選手が多くなっている。自分にあったストライドをつくり・コンセントレーションで競技に臨む。非常に個性のある走りをしている。リラックスをつくるために必要なことは緊張感である。人間の体は、緊張させた後には、リラックスする状態になるようにできている。我々指導者は、心地よい緊張感を選手に与え、その後にくる状態を選手に理解させる。

そうした選手は、緊張感を楽しむくらいのリラクセイションを持っている。そこに大舞台で活躍する精神力があるように思う。

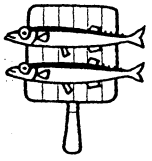
自らの生活を振り返り、リラックスした時間・休日を楽しむためにも、日々の生活に緊張感をもって取り組みたいと改めて感じている。日々の生活には心地よい緊張感をもって生活し週末には、家族とともに、ＯＵＴ・ＤＯＯＲやスキー・ドライブなど「リラックス」した時間を過ごしたい。

そして、心地よい緊張感とは、授業における充実感や学級づくりにおける取り組みにあると思う。今後、学校五日制になろうとしている時に、自分はこのように過ごしていきたいと考えている。

（小布施中）

編集後記

読書の秋、スポーツの秋、食欲の秋、行楽の秋……。様々な形容詞のつく秋を迎えました。さて皆様は、どのような秋を迎えていらっしゃいますでしょうか。

今回の会報は、夏休み中の研修活動を、会員の皆様に報告していただく形でまとめました。原稿をお寄せいただいた方々、本当にありがとうございました。

（担当　畑中　久保田）